

後日レポート 1

3月1日から2週間名古屋大学の研修プログラムによるフランス語語学研修が始まった。この研修プログラムに参加したきっかけは特に何も起こらないこの日常生活において何か刺激になるようなものを探したのがきっかけであり、結論としてはそのきっかけのようなものは見つかったと思う。

まず第一に国際社会において英語ほどは必要とはされていないフランス語ではあるが、この言語についてもっと深く勉強する必要性を感じた。私はフランス語を学び始めて約1年になるが結局勉強してきた理由は今まではとりあえず卒業するために必要な単位がほしいからというのが主な理由だった。実際に興味がなければそれ以上考える必要はない。そして私自身も講義には積極的に参加していたもののまあなんとなくといった感じであった。その一方で理系は1年第2外国語を勉強しさえすれば2年以降はとる必要もないこの現状について考えてみると結局この1年フランス語の勉強に費やした時間を無駄にはしたくないとも思っていた。本当に使えないままでいいのかな、うんどうだろうなど。そこで始まった語学研修。正直ショックだった。自分のフランス語のできなさに。1年もまじめにもやってきていないフランス語をすぐ使えといっても無理な話であるのは当たり前なのにもかかわらず、話せない、聞こえないというのは私の精神に大きなダメージを与えたと同時に本気になって勉強してもっとフランス語のことを知りたいと思った。それだけがきっかけではなく元々宗教をバカにしていた私はキリスト教に出会った。そこで宗教の力はフランスで垣間見た。なぜ神などというものに対しておいのりをするのかと。今も神の存在に関していえば全く信じてはいないが、日本人が寺や神社でお祈りをするといってもそれは個人的な願いでしかなくその寺や神社から祈るものに対して与えるものはそう多くない。けれど土曜日の夜たまたま入ったストラスブール大聖堂のミサを聞いてよくわからないけれど勝手に自分の行いに対する懺悔を行っていて涙がぼろぼろとこぼれていた。もちろんフランス語で何を言っていたのかはよくわからなかったが。そこで感じる宗教というものの大きさを。そして知りたくなったどんなことが行われていたかを。英語でもいいかもしれないが私が本当に知りたくなったのはストラスブール大聖堂で行われていたものについて知りたくなったのでフランス語の勉強の必要性を感じた。

2つ目にはフランスの景色についてである日本では一度も感じることのなかった歩くことに対する喜びである。ストラスブール市街をただ歩いているだけで楽しかった。ただ舞い上がっていただけかもしれないが日本で名古屋に下宿に来た時は実際に何も感じる事がなかった。その要因の一つとしては建物の明るさと大きさがあるかもしれない。フランスは基本的に明るかったように思える。建物の色がクリーム色と茶色がうまく混ざって1つの町が出来上がっているように思えた。一方日本のイメージカラーは

青暗色など全体的に暗いように思える。透明なものはそのままきれいに見えるのかといえどそうでもないように思える。結局日本のイメージは主観的かもしれないが道路のコンクリートというイメージが強いのもかもしれない。だから心に響かない。そして個々の建物の協調性が強すぎるが故の街並みの汚さこれこそが日本の街をきれいに見せられないと思う。といった一面的な意見はあるものの実際にはただの田舎好きの人間でしかないからかもしれない。ストラスブールと名古屋を比較してただ単にストラスブールのほうが良いという意見であるのもかもしれないが。まとめとして新しい街に行く新鮮さを味わうことができた。

3つ目としてはしょうもないことではあるが大きな胃袋を手に入れた。私は日本人である。それが故に食べられるものは全部食べたいという欲望がある。その一方でレストランにしてもパン屋さんにおいてあるバゲット一本にしてもとにかくでかい。それぞれにすごく大きな食べごたえを感じる。しかしもったいない精神が働く私はとにかく完食を目指してひたすら食べ続ける。ストラスブール滞在中の食事は一種の格闘技であると思えた。しかしアルザスの郷土料理例えばグロフやシュークートだけでなくその他のすべての料理においても以前食べたことのあるイギリス料理とは違ってすごくおいしかった。だからさらに食欲をかきたてる。そしてまた食べる。といったような生活を繰り返したせいで胃の大きさが肥大化した上にバゲットによるあごの骨の強化はすごかったと思う。今は元の生活に戻ったのもう失ってしまったと思うが。

そういったものを手に入れた今私はこれからまたフランス語の勉強に励もうと思う。それだけでなく他の言語も学ぶことによってより世界のことについて知る必要性もあるのではないかという気持ちが大切であると私は思った。